

一科学者としての人生観

湯川 秀 樹



湯川博士

私は心理学が好きで高校生の時
にならったが、それはあまりにも
常識的であつた。その時はすでに
フロイトは知られてゐた。
心理学においては、いろいろと
精神分析が行なわれるが、實際問
題として、自分がどういふ原因
で、ある精神状態になつてゐるか
はあまりわかつてゐない。
科学は十七世紀以降
に発達した。自然界にお
いて有るものと無いものを発見し
た。科学の世界ではモヤモヤとし

たものはきらわれる。
私たちの東洋思想の中には、西
洋人が気がつかない知識への洞察
力をもつてゐたといふ。私は、そ
とへむかつて、われわれが知つて
ゐることを知つてゐないことを明ら
かにしようとした。人間の心はこ
のまづ外はむかつて内にもむか
つても開かれてゐる。その反面、
体はかからぬと内か外かはわか
らない。心は生命をもつた動物物
ビールのよつたものである。
第三は生命現象、物理的科学的
心としてのたつき、生物学があ
らわす働きを非常に明らかにする
ことである。しかし、物と生命と
の關係はわからないことが多い。
そして物質と心の關係はいつ
もわからないことが多い。
既知のものがあるから、そこに
却つてわからないものが出てく

開放された世界に 自己の為しうる可能性は

開放された世界といふが、自分
と外の世界の關係においてなにを
自分ができるか、の可能性をきわ
める必要がある。
意識と無意識の外に潜在的なも
のがあつてそれを認める、それか
ら創造的なものにならる。その
いふものが創造的世界観ではない
かと私は思う。

私は頼りないと思はれることがあ
る。学生は物理学は確かなもので
あると思つてゐたが、物理の授業
であつてもわからぬ、これもわから
ぬといふので興味なくなつてい
く学生も出てゐる。しかし、私は
物理学に興味をもつてゐるものと
思つてゐないことを、わから
ないといふのである。
芸術家の道にも未知なもの
がある。宗教家は未知の世界をち
がた方法で明らかにしようとして
ゐる。坊主が悟りを開ききつたら
中、どういふことはよくわからぬ
といふことはよくわからぬ
といふことはよくわからぬ
といふことはよくわからぬ

能力によつて左右されるという場
合は成功するか失敗するかは前も
つてわからない。しかし、努力す
ることによつてなにかできるであ
らう。でもなにか絶対的な保証
はないが、その努力をするこ
とによつて成長がある。そして生
き残る。そして、その努力の方
向にするのは各自の自由である。
そのよき努力をしてゐる中で、
がついてゐるとロンドンクルー

ソニーであつたといふことは、人間一人ひとりのまづこころをな
ない。生きがいをもつて、昔は人間が少なくて、同じ
をしあわせにするほどゆとりはなかつた。昔は百人分
いとも知れないが、自分が生きがいを感じたが今では千人分
いを感じるように努力すればよいといふ。人間のまづこ
ころのまづこころは、現代といふこころ
この時代にわかれは生まれた。
この時代がよい時代か悪い時代か
はなまじい。地球が狭くなつ
た。それはよく狭く感じるよにな
つた。ロケットで月世界に行つて
も、地球上をもつと安心して
て任せる世界にするよつた努力な
ければならない。世界は一つ。これ
は科学の進歩によつてゐる。開放
的世界といふか、ポポロは
ないが相手の自然界は五段や十段
とていふ。百段も千段もあ
る。人間は万物の靈長といわれ
てゐるが、その意をくんで行動して
ゐるのではない。
われわれの世界には開かれた世
界があると思ふ。それに伴つて人
類の体のお互いの連関をしっかりと
する。

そして一人ひとりの人間の生き
がいと人類全体の平和とは別問題
ではなくなつてきた。
交通事故がよくあつてゐる
が、交通事故は科学の発達のおか
げである。ポポロはよく失敗
するが、人間は一度同じ失敗をし
てはならない。

あつて、一人ひとりにしてはこころ
とても非常な生き甲斐である。
私は科学者となつたが私にとつ
てはあつたことである。私は
よく人に頼まれて、よい文句を書
じてくれと頼まれるが、よい文句
といふよりは、私は一日生きる

こころは一つ進んでゐる。こころ
である。
本稿は、大谷婦人会館で行
なされた大谷大学創立記念講
演会での講演要旨、なお文中意を
つくつていない箇處については
文責在記者

c073-001-040